

準備書に対する欠席委員（中村雅彦委員）からの意見

No.	意見（指摘）内容
1	<p>【新聞報道にあったミゾゴイについて】</p> <p>鳥類の調査では、文献調査、現地調査以外に調査地での情報の聞き取りもしていたはずだが、新聞報道によるとミゾゴイの確認情報がかなりあるようである。現地での聞き取り調査などでこれらの情報を得ていなかったのか、また、今後、ミゾゴイについて、何らかの対応を予定しているか伺いたい。</p>
2	<p>【夜行性の鳥類の情報収集について】</p> <p>鳥類の調査は普通、日中に行うため、夜行性の鳥類の情報はなかなか得にくい。夜行性のミゾゴイはこの典型的な例だが、ミゾゴイ以外にも注意すべき種として、ヨタカ、トラツグミ、フクロウ類、オオジシギ、クイナ類が、また、かなりの早朝にさえずる種としてアカショウビンがあげられる。これらの種については地元の野鳥愛好家から情報を得るなど、ミゾゴイと同じ結果にならないためにも夜行性鳥類のさらなる情報の収集が必要と考える。</p>
3	<p>【重要な鳥類の予測結果について（P8-4-1-44～63、表8-4-1-23(1)～(32)）】</p> <p>（1）生息地等との位置関係 「予測結果」の「工事の実施」では、生息地と改変の可能性がある範囲からの位置関係を「改変の可能性がある範囲」、「改変の可能性がある範囲の近傍」、「相当離れた地域」に分けて表記している。鳥類は離れていても近寄ることが可能なため、特に「相当離れている」場合の評価の妥当性を判断するためには、改変の可能性がある範囲と、調査で確認された場所との位置関係を具体的に確認するための資料が必要である。</p> <p>（2）同質の生息環境 「予測結果」の「工事の実施」で、「同質の生息環境が広く分布しているため、生息環境は保全される。」との記載が多いが、同質の生息環境が広く分布しても、その中の特定の場所に営巣するケースがあり、評価の妥当性を判断するためにはそうした状況を確認するための資料が必要である。例えば、オシドリ、フクロウ類、プッポウソウ、キツツキの仲間など木の穴を巣とする鳥では、同質の環境が広く分布しても、木の穴が改変の可能性がある範囲に集中する場合もあり、他の鳥類でも、ノジコなどは生息地の中のより湿潤な環境で営巣するが多い。</p> <p>（3）予測結果 重要な鳥の予測結果のうち、「工事の実施」については、オオタカ、ノスリとクマタカ以外は「生息環境は保全される」という結果になっている。また、「鉄道施設の存在」では、すべての種で「工事の実施による生息環境の改変以外に新たな改変はないことから、鉄道施設の存在による生息環境の変化は生じない。したがって、生息環境に変化は生じない」との結果である。これは鳥類だけではなく、すべての動物に当てはまっており、普通に考えるとこれだけの大事業に伴い、「すべての動物にほとんど影響がない」というのは疑問である。すべての動物に何の影響もないということは「何も事業をしない」と同義であり、「影響がない」根拠として、前述した「相当離れている」、「同質の生息環境が広く分布する」と判断したことに問題があるのではないか。</p>
4	<p>【事後調査について】</p> <p>生物の場合、突然、近傍で繁殖する場合もあるため、事業者は、予測結果が外れた場合の対処をすべての種（検討種だけでなく）で考えておくことが必要である。予測評価は大事だが、外れた場合の対処法を考えることも予測結果を検討する以上に大事なことと思う。事後調査については、P. 8-4-1-107以降に記載があるが、具体性に欠ける印象である。私が以前係わった保全事業では、事後調査を踏まえた対処法について、フローチャートで具体的に示していた。</p>